Nest of　Dragon　～気高き契約～

神酒　羽乃魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｅｓｔ　ｏｆ　Ｄｒａｇｏｎ　～気高き契約～

【Ｎコード】
Ｎ２２８２ＢＡ

【作者名】
神酒　羽乃魅

【あらすじ】
主人公である　桜夢　美智霞　は、生まれる時に母をなくし音を失った。小学校で親友ができ、中学校でクラスが分かれ、つらい日々をおくっていた。しかし、そんな美智霞がある日、ドラゴンに出会い、ある契約をすることになるのだが・・・。
その後、美智霞の日常は一変する！
契約内容と違う報酬までもらっている事に気づき、
ある重大な秘密を知ることになる。

壱　最悪な目覚め

目が覚めるとそこは、ただただ真っ白な部屋だった

私が身に纏っているものも、シミが目立ちそうな白いものだった。

しかし私の横には一つ・・・、いや一人白くない人が私を見つめていた

「お父さん？」

驚いたように父は私の手を握った。

「うっううっ！よっ良かった。本当に良かった！死ななくて本当に・・・！！」

「！」

いやそりゃ驚くよ！だって何がなんだか分からないのにいきなり親に死ななくて良かったって言われたら。

「うっ！」

頭が痛い・・。ズキズキする・・。

冷静に考えないと・・。思い出せること全部とりあえず・・。

・・・・？

まって、今私父さんとしゃべってた・・・。

父さんの声が聞こえた。生まれて初めて・・・・。

確か私、耳が聞こえなかったはずじゃ・・・・・。

いや、そうじゃなくてまず、

自分の事思い出して、そっから整理しないと頭が追いつかない・・・。

私の名前は桜夢　美智霞、１３歳。もちろん女。

女じゃなかったらむしろ気持ち悪い。

それで今年中学校に入学したばっかり。

あと、えーっと・・・・。

「美智霞??」

父は心配そうに私の顔を覗き込む。

「なんで?私この通りぴんぴんして・・うっ!ぐっゴホッ!ゲホゲホッ」

腕を振り回した瞬間、

私の背中に骨盤から首まで背骨を駆け上るような激痛が走った。

すると白衣を身にまとった人が私の背中を察すってきた。

とても申し訳なさそうな、まるで私を哀れむような視線・・・・。

察しがついた。

ああ、なるほど・・・・。納得だよ。

でも頭の中でいくら落ち着かせようとしても、そんな冷静に構え

ていられなかった。

恐怖。生まれて初めてだ。こんな恐ろしい恐怖は・・・。

いじめられても、けなされても

今なら全然怖いなんて思わないだろう。

「・・・・」

医者は黙ったまま私の背中をさすり続ける。

「なっなに?何なの先生。私ちゃんと受け止めるからさ。」

患者に気を遣わせるなんてとんだ医者だよ。

しかし医者は私に背を向け、父さんに一言

「ついて来てください。」と。

部屋で一人になり、すこしほっとする。

ほっとするあまり真っ白なシーツに水が零れた。

何でだろう??一人になると、こらえてた物が溢れてしまう・・。

こんな姿、父さんに見せれないよ。

落ち着いてすこし頭を整理する。

私のもやるべきことがある。

まず、昨日の出来事を思い出すんだ。

そうすればきっと、私のみに何が起こっているのかも分かるはずだ。

しかし私はそのまま眠りについてしまった・・・。

弐　初めての親友

私は小学校のときから、ほとんど一人ぼっちだった。

何か集団で行動するときは、できるだけ嫌そうな顔をする子達を避けて

グループに加わった。

小学校六年生のときに初めて、やっと分かり合える友達に出会えた。

彼女の名前は　神前　亜莉那　。

親友になれた。彼女は筆談で私と会話してくれた。

耳が聞こえない私にとても親切にしてくれた。

それから1年間、二人で多くの行事や物事を一緒に楽しんだ。

楽しいほど時間の流れは早く、ついに卒業式を向かえ・・・・。

私はそわそわしながら、ポケットからシャーペンとピンクのメモ紙を取り出し

亜莉那に見せる。

『中学校入って、もしも違うクラスになったらどうする??』

『どうするって、美智霞ってば心配しすぎだよ!!』

親友が笑っている。

私はいたって真剣なのだが・・・。

『だってクラス１０個もあるんだよ?それじゃあさびしいよ』

『大丈夫だって!学校が違うわけでもないんだし、ほら!部活とか同じとこ入れば
いつでもあえるでしょ?』

親友は私にほっとさせるように微笑み、シャーペンとメモ帳を渡してくる。

すこし不安は残っていたけど、親友の顔を見て落ち着くことができた。

私は満面の笑みで親友のほうを向き、大きく頷いた。

彼女だけを信じて・・・。

参　裏切りは突然に・・・。

中学校のチャイムの音が鳴る。

私は１－２で小説を読んでいる。

彼女・・・私の親友だった人は１－９で友達と騒いでいる。

なぜこんな事になったのだろうか・・・。

そもそも亜莉那が同じ部活に入ってくれなかったのが始まりだ。

私と一緒に行こうといっていた陸上部に入らず、新しくできた友達と

テニス部に入った。

その上、最初は休み時間、一日に3回くらいは私の教室に遊びに来てくれたり、

私が彼女の教室に遊びに来るのを彼女が待っていてくれた。

なのに近頃は一週間に一回あるかないか・・。

私が行ってもドアの外なぞまったく気にせずに

仲の良い友達と騒ぎまわっている。

少しの間だけだと思っていた。

彼女が私を裏切るはずがない。

しかしそれは私の誤解だったようだ・・・。

今日久しぶりに教室移動のときすれ違い目が合った。
気分が晴れたが、それもつかの間。

ニコっと笑おうとしたが、彼女はすぐに目をそらし、楽しげに友達と喋っていた。彼女の長いポニーテールが私に背を向けた。

しかしそんな学校生活の中唯一幸せだったのは、梓縞（しじま）　亜貴斗（あきと）
彼が私に笑いかけてくれることだった。

彼はみんなに優しく、私にやさしい笑みを浮かべてくれる。

小学校の４年生のころからずっと、彼の笑みを見るのが大好きだった。

クラスの男子は私に声が聞こえないことをいい事に、
わたしに意地悪ばかりしているっぽい。

ホント誰かとは大違いだわ。

チャイムの鐘の音を聞き私は一人で部室へ向かう。

早めに行かないと、人がいっぱい来ると嫌なことしか起こらない。

校舎を懸命に走りぬけ、部室のドアを思いっきり開閉する。

フウっと一息入れ、急いで着替え一人で部活を始める。

今の陸上部は先輩がほとんどサボっているため

別に誰が何しようが怒る人も居ない。
顧問も居ない
ほとんど真面目にやっているのは私だけだが、
それでも人が来るんじゃないかと心配になる。
走るのは気持ち良い。
何もかも、走っている間だけは忘れられる。
唯一不満があるとすれば
走るときに風を掻き分ける音。それが一度で良いから聞いてみたいと思う。

二、三時間ほどしてすべてのメニューをこなし
帰りの用意をする。
荷物を背負い一人校門に向かう。
しかし私はそこで見たくないものを見ることになる。
（あれは、亜貴斗くんと・・・・・。）
もう一人女の人が見える。男の人だったら気にしなかったのに。
ちょうど彼らはプールの裏で楽しげに会話していた。
女の人のほうは・・・竹内（たけうち）　凜禰（りんね）ちゃん？？

彼女は中学に入ってから私の代わりに親友の横を歩くようになったこのひとりだ。
私とは何もかも正反対で何でもずばずば言える。
でもなんで彼女と亜貴斗くんが??
こっそり覗いてもばれないだろう。
そう思い影で彼らの様子を伺う。
亜貴斗くんが笑っている。
女子とはあんまり話さないのに・・・。
あ！みたくないもの見てしまった。
次の瞬間、私はその場から逃げ出した。
「あうう！うあああああああーーーー。」
私が今走れる精一杯の力でとにかく走った。走った。
何もかも忘れるために。
しかし、忘れようとすればするほど
私の頭にあの映像がよみがえる・・・。
彼女、凜禰と亜貴斗は仲良さげに腕を組んだのだ。
彼らは私に気づいただろうか。
もう嫌だ。

こんな報われない人生。ひとつくらいいい事あってもイイじゃないか。

横断歩道を急いでわたり、家へ直行する。

かばんに手を突っ込み、カードキーを出す。

父は仕事だ。

母はどうして私なんか生んだのだろう。

生まなかったらきっと、母も父も生きたまま楽しくやっていけただろうに。

私も意識を持たずにいられただろうに・・・。

ドアを開けて二階へ駆け上がり、自分のベッドに倒れこむ。

ううっ！なんで？何で私ばっかり・・・。

その日私は夕飯も食べずに寝てしまったという。

四　契約者Ｄｒａｇｏｎ

暗い・・・。気持ちの悪い夢。

何にもない。

どうせ夢ならもっと楽しい夢が見たかった。

いや、夢なんか見ずに何も考えずに眠りたかった。

は～。よりによってなんでこんな日にこんな夢みるのよ・・・。

「おい。」

うん？今何か聞こえたような・・・。

でも私声聞こえないし・・・。ってこれ夢だし関係ないか。

「おいってば！」

何よ、こいつ。うるさいな。

きいこえてるっつーの。

「はいはい、なあ・・・・。」

「に」と続けるはずがそこでとまってしまった。

息も声も出ないくらいに驚いたから。

声の呼ぶほうには、見ず知らずの生物がいたのだ。
それだけならともかく、そいつからは物凄い気迫が感じられた。
震え上がった。

「ぷふっ！初々しいなあ！まあ初めは皆そうだから、
おめーが珍しいわけでもねーけどな。」

驚き怯えて、しっかりと見ていなかったけど
よく見るとまったく見覚えがないわけでもない。
それは小説や絵でお目にかかったものだ。

「ドラゴン？」

私の小さすぎる声はやつには届かずに、心の中で反響した。

「・・・・。」

「・・・・・。」

「・・・・・・。」

「・・・・ってなんかしゃべれよ！」

「ふっ。なかなか生意気だな貴様。腰抜かして何もしゃべっていなかったのはお前だろに。」

なかなかムカつくドラゴンだ・・・。

「・・・で？」

「困ってんだ。ちょっと協力してくれねーか。　いそいでっから早めに決めてくれ。

別にただでやれとはいわねーよ。契約ってやつだ！」

なぜかドラゴンは自慢げに語る・・・。なぞだ・・・。

なんにせよ怪しい・・・。

怪しすぎる。

夢とはいえ面倒事にあうのは本当にゴメンだ。

「すみません。母に知らない人の話し聞いちゃいけないって・・・。」

母はいないけどここはやっぱり決まり文句。

相手が知ってるはずないし何いったって別にいーだろ♪

しかし奴は小ばかにした顔と同時に哀れむような顔で私を見る。

「そこは知らない人についてっちゃいけません！だろ。決まり文句は。

知らない人に道尋ねられてお前は逃げるのかよ！」

なかなか鋭い突っ込みありがとう！

って別に待ってたわけじゃないよ？この突っ込み。

「それにお前、母なんかとっくの昔に亡くなってるだろが。

お前が生まれたときにな。」

「！！」

知ってるはずない。はずないのに・・・！！

「うそ？なんで！えっなんで？？」

「なんでって。そんな驚くこたぁねえだろ。お前らとは別の生命体。

どんな能力持ってたっておかしくねーだろ。

それにお前の夢の中に入るには、必要な情報だしな」

低く太い声が暗闇に響き渡る。

ん？夢の中に入る？？どういうこと？？頭が破裂しそう・・・。

ていうか、自分で別の生命体って言っちゃてる。やっぱりそうなんだ。

って当たり前か。

「そうじゃなくて、契約のほうに話し戻して！

契約の内容聞かないと答えようがないよ。」

「ん？ああそうだな。すまん。」

「先に報酬が何か教えてくれる？」

図々しいやつかもしれないがこれは大事。

面倒なことに巻き込まれて報酬がしょぼかったら
最悪だもん。
それに所詮夢。現実になったとしても
面倒なこと、つまりは魔法とかそっち系の事になって
問題が起こったらもうあの忌々しい学校に行かなくてすむ。
「お前が一番望むもの、ひとつだけ叶えてやろう。さすがに何でもは無理だが
現実的にありえるものなら叶えてやれるぞ。」
私はひとつピンっときて答える。満面の笑みで。
「じゃあ殺して♪」「・・・・・・。」
無表情ｖｓ満面の笑み。そのまま暫(しばら)くたった頃、
しゃべり始めたのは「別の生命体」だった。
「お前、無理すんなよ。俺にはお前が本当に叶えて欲しいことぐらいわかってるんだぞ。
かなえられるんだぞ？」
「・・・。」
「つらかっただろう。耳が聞こえねぇせえで大変だったんだな。
お前さえ望むのなら、俺はいつでも叶えてやる。頼みを聞いて

くれたらだが。」

私は黙ったままうつむいた。

思い出したくない過去が涙とともにあふれ出す。

私は表情を変えてピシッと顔を上げた。

「なかなか口上手ね。いいわ。

報酬はそれ・・・私の耳が聞こえるようになることでいいわ。

でもまだ頼みごとを聞いてないから、契約するかどうかはまだ未決ということで。」

「おう！俺たちはな、とある事情でお前たちのいる世界にいるんだが、

行動するときに身を置く場所が必要になんだよ。

しかし、どうしてもこの世界に用事があってな～・・・。」

話が長いのは嫌いだ。私は腕を組み話をさえぎる。

「前置きはいいから！！単刀直入にいってくれる？」

「まったくせっかちだな～。仕方ねえ。つまりはだな。えっと、その～。

お前の背中に住まわしてほしいんだ。最初は副作用とか出たり、

すぐに報酬の結果が現れなかったりするが、お前なら大丈夫だろう。」

「・・・それだけ？」

あっけにとられた顔で聞き返す。

「たまに俺の用事に付き合ってもらうことになるが、おお。それだけだ。」

「いいわよ？」

「よっしゃ！契約成立だな。もう寝てもいいぜ。」

奴はスーッと暗闇の中に消えていった。

そういえばドラゴン一匹一匹にも名前ぐらいあるよな・・・。

あたし名前聞いてねーや！

ん？あ、そういえばこれ夢だったっけ。

夢だと気づいたが、いつになったらこの暗闇の中から抜け出しおきれるんだろう・・・。

そんなことを考え、しばらくして私は深い眠りについた。

五　音を手に入れた世界

私は目を覚ました。

目を覚ましたけど。そこに父さんはいなかった。

まだ病院の先生と話し込んでいるらしい。

全部思い出した私は、近くにおいてあった愛読書を開いた。

父さんがわざわざもって来てくれたのだろう。

その本の背表紙には力強いドラゴンの絵が描かれている。

「ドラゴン・・・か。」

見えるはずないんだが一応自分の背中にむいて話しかけてみる。

「ねえ、もういるんでしょ??現実なんだよね?病気なわけないもん。」

「・・・・・。」

「・・・・ねえってば!」

その時、ガラッと病室のドアが開いた。

「美智霞?誰と話してるんだ??」

「父さん・・・。ううん、なんでもない。音読してみただけ。」

苦しすぎる言い訳・・。

父さんはその時なぜか、不安や恐怖を感じるかのような顔をしていた。

まるで何かを恐れるような・・・。

すると次に医者が入ってきた。

「美智霞ちゃん、君の病気、病名が分からないんだ。
背中にはおかしな痣(あざ)があるし、健康そうには見えるんだが背骨に異常があるんだよ。」

医者には悪いけど私にはおおよそのことは分かってるし、
私が死ぬわけでもないことも夢の内容を思い出して分かった。

でもおそらく、私はここに居座らされ続けれのだろう。

「先生。娘は後どれぐらい生きられるんですか??」

父さんは先生に小声で尋ねている。

「おそらく持っても1年かと・・・。病名が分かりませんので分かりませんが・・・。」

すると、医者は思い出したかのようにはっと目を見開いた。

「そういえば私、一度同じような患者が・・・・・。」

医者のボソッとしたささやきを父さんはさえぎった。

「先生。娘を学校にやれないんですか??」

「危険かと思います。しかしもし彼女が残りの人生を普通に過ごしたいと願うなら・・。」

「先生。私学校行きたいです。私耳聞こえなかったけど、聞こえるようになったんですよ。この耳で、死ぬまでにたくさんの音を聞きたいんです
皆の声も・・・・。」

それにもういじめようが、私はいじめてくる奴らが何をいってるのか聞き取ることができる。

私にとっては今までで一番最強の武器を手に入れたようなものだ。

「本人がそう望むのなら、止めません。しかしくれぐれも健康には気を遣ってください
少しでも長く行きたいのなら・・・。」

医者さんよお、それは違うよ。

私病気じゃなくてドラゴンが行ってた副作用だから。・・・・多分?

あいつ私なら副作用でないとか言ってたのにどういうこと??

それにさっき話しかけても全然返事しないし。

「じゃあ父さん、退院の手続きしてくるから。」

父さんはそういって病室を後にした。

医者もその時一緒に出ていった。

その時ふと医者が言っていた背中のあざのことを思い出した。

そういえばと思ってトイレにある鏡で確認しようとする。

私は決して身長は大きいほうじゃないので

背伸びしないと自分の背中は見れない。

「よっよとっと！」

精一杯伸ばして後ろを向いて見えた痣はとてもこの世のものとは思えない模様だった。

不思議な模様とかそういうことではなく、

直感がそう判断を下したのだ。

先入観があるせいもあるかもしれないが、

痣にしろ刺青にしろ無理なのだ。

模様は意外とシンプルで誰にでもかけそうだが

白い炎が小さく、しかし強く燃え盛っていたのだ。

誰でも直感でそう思うだろう

こんなものがあれば。

私はその後、そこで気を失ったらしい。

近頃、倒れてばかりだ。

しかしそれも仕方ない。

立て続けに、信じられないことばかり起きたのだから・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2282ba/

Nest of　Dragon　～気高き契約～

2012年1月6日16時49分発行